

氏 名 布谷 知夫

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第130号

学位授与の日付 平成16年9月30日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究

論文審査委員 主査 教授	吉田 憲司
教授	大塚 和義
助教授	川口 幸也
教授	久留島 浩
教授	後小路 雅弘（九州大学）

論文内容の要旨

これまで博物館学において行われていた議論は、現実の博物館の状況を反映して、いかにして資料を長期に保存するか、あるいは博物館をどのように運営するかといったように、博物館の設置者の側から見た博物館のあり方を議論するものであった。そのため、内容的には技術論が中心になり、博物館利用者の存在が、博物館の運営にどのようにかかわりがあるのかということについては、ほとんど議論がなされなかった。

本論文においては、利用者の視点にたち、次代の博物館のあり方を考察した。その際、とくに重要視したのは、次の三つの点である。

ひとつは「すべての博物館の事業について利用者の視点」で考えることである。博物館の事業は、例えば博物館法によれば『資料収集保存、展示、普及教育、調査研究』の四つということになっている。多くの人が利用する博物館は、普及教育だけ、あるいは展示だけではなく、博物館のすべての活動を利用者が参加することを前提として、利用者の視点で運営方法を考えることが必要である。

二つ目は「博物館の四つの事業は相互に結びついて行われる」ということである。それぞれの事業が独立して行われていては、全体としての発展性は生まれない。例えば研究の成果は展示や教育学習活動の中で生かされ、そのような活動に参加した人から資料の寄贈がおこなわれたり、研究会や同好会などへの参加があり、さらにそこから新しい研究のテーマが生まれるなど、ひとつの仕事は他の博物館の仕事の発展にむすびつくような活動のあり方が博物館には求められる。

そして三つ目は、「研究の発展と成果の発信が博物館の豊かな経験を生み出す」という考え方である。博物館は利用者にとっては、まず主体的に学ぶことができる場であり、それは展示のみならず、日常の博物館の活動のどの場面においても同じである。他のアミューズメントの施設や社会教育施設と異なり、博物館の学芸職員の研究活動の発信は、独自の研究の成果を基にして行われ、その研究から発展した展示や学習教育の活動にと結びついている。ある意味では博物館の魅力は、学芸職員が研究をし、その内容や経験を直接に利用者に伝えることにある。したがって、博物館の四つの事業の基礎にあるのは研究であるといえる。

この三つの考え方は、これまでも議論がされている部分があるが、この考え方をいわば一体のものとして博物館の活動を総合的に考え直そうという方法は、これまでにはなかったものである。

このような視点で博物館利用者と博物館との関係を考えてみると、博物館をこれまでのように教育のための施設とは考えず、利用者が主体的に活動をするための仲間づくりやきっかけづくりの場となるようにすることを考えるべきである。そして象徴的な議論として、近年に話題になることが多い博物館でのボランティアについては、博物館という場を活用して本来行われるはずの活動の一部だけがボランティア活動として位置づけられている場合が多く、それは博物館と利用者とのかかわりを考える上では混乱を生じているため、博物館でボランティア的な自主的な活動を行う利用者を博物館のさまざまな利用形態であると位置づけたうえで、ボランティアという呼び方にかわってミュージアム・パートナーという語を用いることを提案した。

本論文では、以上のような立場からさらに、博物館で行われる各事業についての検討を行った。

研究活動については、他分野の研究者と日常的に議論ができ、現場が近く、さまざまな形で成果を発表でき、同時に批判を受けることができるという博物館ならではの研究の可能性について論じ、この活動が博物館活動の基礎であることを強調した。

利用者向けの事業については、「普及教育活動」という言い方を「交流活動」という名前に改めた上で、だれもが参加でき、同時に好奇心を持続しながら次のステップアップをはかることができるようなプログラムの必要性について指摘した。

資料整備活動では、情報の媒体という視点から、これまで博物館で扱われてきた資料の性格を改めて検討し、資料とその情報の活用の方法を論じた。

展示活動に関しては、展示を見る人にとって自分との関係がわかり、自分の問題として考えることができるような展示が重要であることを指摘し、その具体例を提示した。

このようにすべての博物館の活動を利用者主体にして見直したことが、本論のもっともオリジナルな特徴であり、また今後の博物館学に対して貢献できる内容である。

博物館の理念や実際の事業についての個別の議論は、これまでもそれぞれに行われてきたが、利用者の視点を持つことで、博物館の理念はどのように変わる必要があるのか、またそういう理念を持った博物館は実際にはどのような事業展開を行うのか、ということを経験的に行った例はない。今後の日本の博物館が、利用者を迎え入れ、利用者とのかかわりを強めながら運営がされていくことは明らかであり、本稿の議論は今後の日本の博物館のあり方を考えていく上で、現実的で重要な提案になると考える。

論文の審査結果の要旨

布谷知夫氏より学位申請のなされた本論文は、利用者のための博物館という統一的な視点から博物館の営み全体を再考し、資料収集・保存・研究・展示・情報化・教育普及といった博物館活動のあらゆる局面に利用者が参加することを前提として運営される新たな博物館像を、その実践例とともに提示したものである。

1980年代以降、世界的に博物館をめぐる議論が活発化している。博物館という装置の持つ政治性が認識され、その問題点と可能性が追究されはじめたからであるが、そうした動きのなかで、新たな博物館のあり方として、地域コミュニティと一体化し、コミュニティの成員をまきこんだ「参加型の博物館」が提案されてきた。しかし、その議論の大部分は展示の企画もしくは出来上がった展示への参加をめぐるものに留まっている。「博物館の活動の主体は利用者にある」と断言する著者は、利用者たる地域コミュニティの成員と博物館が、ともに資料を収集し、研究し、それを展示にまで組み立て、さらにはその後も継続的に情報を共有していく方途を、自らの琵琶湖博物館での実践を踏まえて具体的に提示した。しかも、著者は、そうした活動を、博物館と利用者がともに成長する方法として位置づけている。明確な理念に基づいて新たな方向性を打ち出し、その理念のもとでの具体的な活動を実践に裏打ちされたかたちで提示した本論文は、博物館学 (museumology) に新たな貢献をなしたものとして高く評価できる。

著者は第1章「序論」において、欧米と日本における博物館の歴史と博物館をめぐる従来の議論を概観したうえで、少数の学芸員によってあらゆる活動をカヴァーしなければならない日本の大多数の博物館では、欧米に見られるような研究職と教育職の分化は非現実的であるとして、本論文の議論を日本における博物館をめぐる議論に収斂させる根拠を示す。

第2章「利用者の視点にたった博物館の理念」では、まず人は「主体的に学ぶ」ために博物館に来るのだという基本的認識が提示される。著者によれば、博物館での経験においては、利用者一人一人が自らの関心のもとで発見し、学習し、さらには情報を発信することで自己を実現することが重要なのだという。この利用者の主体の実現という視点から、この章では、テーマの設定、参加型活動のありかた、ボランティアの位置づけが考察され、重要な見解が各所で披瀝される。すなわち、いかなる展示においても、それが利用者にとって「自分の生活とどのように関係しているか」が示されていないといけないという指摘。参加型の博物館とは、博物館がおこなうすべての活動分野に対して利用者の主体的参加と発言が保証されていないといけない、という主張。学芸員が博物館活動の全般に関わらざるを得ない日本の状況の、専門的情報の利用者との共有という視点からの再評価。さらには、博物館と利用者との互惠の関係を示すという立場からの、ボランティアという語に代わるミュージアム・パートナーズという語の提案、などである。

第3章「利用者の視点にたった博物館の実践」は、第2章で提示された基本理念に照らして、研究、交流事業、資料、展示のありかたが検討され、自らの経験に基づいた実践例が提示される。琵琶湖博物館は、地域コミュニティとの密接な連携のもとに調査・収集・展示を実施し、この分野での先端的な成果をあげていることで知られるが、そうした実践が著者の掲げる理念と呼応したものであることに改めて気づかされる。また、続く第4章

では、同じ理念に基づいて、博物館のさまざまな施設が検討される。「利用者の視点」にたつとき、施設・設備の細部のあり方までもが大きく変容せざるを得ないことが説得的に示されている。

さまざまな分野で「利用者の視点」の重要性が叫ばれてすでに久しい。しかしながら、その「視点」から現実の事象を組み替えることの困難さは、それに成功した例がきわめてまれであることを見ても明らかである。そのようななかで、博物館のさまざまな活動から施設・設備の細部にいたるまでを「利用者の視点」から再検討し、あらゆる場面で「利用者の参加」を可能にするあり方を実践とあわせて提示した著者の功績は大きい。本論文の議論は、先述のとおり、日本を対象を限定して進められているが、欧米以外の国々の博物館の大半が、世界全体を対象としたものでなく、限られた人的・財政的資源のもとでそれぞれの地域に根ざした収集・研究・展示に従事している現状では、本論文の議論は、結果的に、グローバルに通用する新たな博物館像を提示するものとなっている。

その一方で、本論文には、さらなる検討が望まれる点もいくつかみられる。

「利用者の視点」への着眼は、これまでの博物館論と博物館運営が、博物館の側の視点からなされてきたことに対する反省から生まれたものであり、そのかぎりにおいて、著者は博物館という装置のもつ政治性を現場での体験に即して感得していると考えられる。しかしながら、論文そのものの中では、そうした博物館の政治性についての詳細な考察はなされていない。この点の考究がなされていれば、本論文の議論がさらに透徹したかたちで組み上げられたと考えられるだけに、惜しまれる点である。

また、本論文においては、理念と実践との整合性が強調された反面、実践例における問題点の検証が十分になされていないきらいがある。問題点を含めた検討を通じて、今後の博物館活動におけるさらなる可能性に議論を開くことが期待される。

もとより、これらの点は、機会を改めて論じるべき課題であり、提出された本論文の達成と価値を損なうものでは決してない。利用者の視点に立った独創的な博物館像をその具体的実践例とともに提示したという点で、本論文は博士の学位に十分に値するものと判断する。